

制労働というイメージで死に至った人もあるが、就業渡航で日本へきて、比較的自由な環境にあった人々もある。それだからといって、被徴用者が優遇されていたわけではない。戦時下の労働力確保という国策の為にさまざまなかたちで徹底的に収奪されたのである。

被徴用者等の無縁遺骨の実態を調査し、身元を判明し、遺族・親族を捜索し、しかるべき方法によって遺骨を奉還することが求められている。

しかしながら、現場寺院や行政や日韓両政府の協力にもかかわらず、この条件に合致する遺骨は現在のところほとんどない。今後調査が進む段階で、遺族の判明数も高まることが予想されるが、おそらく九割以上が遺族へ届かない「無縁遺骨」として留め置かれる可能性が強い。

無縁遺骨は死亡者と遺族の恨（ハン）の象徴である。朝鮮民族にとって恨の情緒は、単なる怨念ではなく、あこがれや悲哀などの入り混じったポジティブな感情である。かかる恨を、遺骨を返す側が深く受けとめ、それを癒す縁となることが宗教者に求められる。その意味では、遺骨奉還にまつわる追悼は単なるセレモニーではなく、奉還の本質・中核をなすものとなるであろう。

ヤスクニや国立の追悼施設とは異なる、歴史の真実と和解に捧げられる追悼のあり方が求められている。

明治初期における教導職の「敬神愛国」観

藤 田 大 誠

明治初期における教導職の「敬神愛国」観について検討する場合の資料は、「三教則衍義書」をはじめ、「十一兼題」のうちの「愛国ノ説」に関する解説など、枚挙に暇が無いほどあるが、これらを検討した研究はさほどある訳では無い。また、これまで、神道家や仏教者による「敬神」観の考察は比較的多いため、本発表では、神道・国学系教導職の「愛国」観の一部を紹介することによって、その一端を窺うこととしたい。

まず、権少教正・田中頼庸の『三條演義』（明治六年四月）は、神道系の三教則衍義書の中でも最も標準的なものとされて他の衍義書にも大きな影響力を与えていた書といえるが、東京大学附属総合図書館所蔵『陽春蘆菟集録』巻にはこの『三條演義』の原型となる頼庸の二つの衍義書（『三則演義』『三則略説』）が綴られている。いずれも「神祇省野紙」に書かれており、『三則演義』の末尾には「右三則演義明治五年六月於教部省編輯課田中頼等所撰述也」とあるので、恐らく教部省編輯課官員ら複数名による作業であったことが窺え、本資料が当時同僚であった小中村清矩の関係資料に綴じられていたことも頷ける。

神道大教正及び諸宗大教正の名で「本省御中」として教部省に出された『三條略解』（明治五年十月）は、各教導職における解釈の最低限の共通理解を目指したものといえるが、ここに

第14部会

は、「敬神トハ、天祖天神ヲ始メ、凡ソ朝典ニ列タル大小ノ神祇及ビ土地ノ氏神生土神等ヲ崇敬スルヲ謂ナリ。愛国トハ、凡ソ人トシテ君父ノ国ヲ愛スルハ天理ノ常ナレバ、各々其職ヲ尽シ報恩ヲ計ルヘキヲ謂ナリ。持統紀ニ尊朝愛国トアル是ナリ。此旨ヲ体認シテ教諭スベキナリ。」とあった。平田俊春はこの『三條略解』の立場をもっとも率直に受けて「敬神と愛国を別箇に解説しているもの」として田中頼庸『三條演義』を挙げているが、事実は逆で、田中ら教部省編輯課官員の方針が『三條略解』に影響を与えたのであらう。

また、権少教正・堀秀成は、「愛国」(『本教講録』第一輯、明治十三年十月、『三条教則衍義書資料集』)と題する説教において、「我々は決して国体くとかましく、国体をのみ説く職掌ではない。此国体を万世に維持する心得方を、各々に対して説諭する職でござる。」と教導職の務めを明快に説いている。堀の愛国論は、「世に無用の人とならぬ様に、心懸て、我皇国三千五百万の人民、同心協力したらむには、皇統一系の御国体も、名実実相適ひて万国に誇るべき国となるでござる。唯手を拍て神様を拝むばかりが敬神でも無く、喋々と国自慢をするが愛国でもござらぬ」という抑制の効いた、決して排外的では無い「自主独立」のナショナリズムであったことは明記しておいてよいものと思われる。

最後に明治二十年代の「愛国」論への展望として、事実上、皇典講究所関係者による雑誌出版活動の嚆矢である『日本文學』第一(明治二十一年八月二十五日)の「日本文學發行の趣旨」を挙げる。ここには、「我が国民として、国柄を詳にし以

て愛国の思想を發達せしめ、自主自重の氣風を養成し、国力を充実せしめんとするにあり。凡愛国の情は、国柄を知らざれば起らざるものにして、猶人を愛するものは、能く其人の性質本意を知り、花を愛するものは、能く其花の性質品位を知れるが如し。是真に愛するなり。」と記されている。これを書いたのは、「教学分離」によって明治十五年に創立された皇典講究所の「創建係」として重要な役割を果たした松野英雄だが、大教院や神道事務局編輯課時代に著した『名教集語』は、残念ながら巻之一のみが財団法人無窮会神習文庫に所蔵されており、松野の当時の「愛国」観を窺うことはできない。

「特高教本」におけるナショナリズム

小島 伸之

多くの論者によって指摘されているように、ナショナリズムは多義的でかつ多様な概念である。それは、当事者用語として多様な思想・運動がそう示されてきたこと、また、近代における国民国家創出を志向した思想・運動の分析という視点によって研究的に彫刻されてきた概念が、その後の(そしてそれ以前の)歴史上の社会現象の分析に応用されたことに起因する。本報告は、ナショナリズムの多義性・多様性、各ナショナリズムの相互間関係性をテーマに、特別高等警察に関する「教本」「参考書」を事例として、①特高警察が国内の nationalism 運